

資料

横川先生と佐伯

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

前回は、稲作について触れましたが、こんどは畑作について紹介いたします

郷土の農牧業 (横川末吉「郷土の研究」)

2 畑作

洪水の害を述べた所で区分した三地域について、順々に考えていきましよう。

イ、内陸地方(番匠川の上流)

中野村(注本五村)の小半の付近には、りへばな段々畑があります。

段々畑といえは、寸々海岸地方を思いますが、山間部にも小半の外に、中野村の荒瀬、因尾村(注本五村)の日平、久留須川流域(直川村)等にかなり発達しています。

千野に近づいて、上野村(注弥生所)の西運寺の台地、白山の台地、明治村(注弥生町)の備後の台地等、なかなか数えあげられなほどたくさんあります。

地形図を見ると、たいてい等高線が少しあらぬになつており、前の地勢の所で説明した灰石やロー

の台地下当ります。海岸部よりモと広々とした段々畑で、土はロームや灰石の風化したとて深いもので、今は主として、いもを栽培しています。

前には桑を植えたこともあり、将来は時々、桑の状態で残って、たばこにでも、しようがにでも利用されそうです。

重岡や小野市でも同じ種類の畑地が、たくさんあります。田代付近には、浸食された台地が段丘になつて、とても畑地が多いように見受けられます。中岳川と流の血内では、ロームの台地と谷間の水田が交互に並んで、よく利用されています。

地図では、原野のしるしであらわされた部分の中で、山地地帯で注意せねばならぬのは焼畑です。

この中心は因尾村の山部ですが、一般に小野市の西山から因尾、更に中野村小川から明治村の尺間にかけて、さうと礎岩角帯山地と一致しています。

小野武夫博士の説によりますと、焼畑は「最も古い農業の形式の保存されたもの」だそうですが、因尾の一番奥に、この形式が保存されたのは交通上の結果でしょう。

その特徴は耕地が一定しておらず、四、五年も作れば、また元の原野にかえすのです。

まず、盆の前後に草を切つてかわかし、夕立前を見計らつて焼き、そのまだ熱い灰の中に種をまくのです。第一年にはお米、お米、陸稲を作り、第二年からは豆類を作つて地力を補いながら、肥料を全くやらす、三、四年が、四、五年間、山地斜面を利用するのです。

灰の力り分と休閑中の肥料分だけです。地力が尽きてしましますが、焼いた土地には病虫害がな

く、雜草もはえ下くいで骨折りも軽く、土地さえ
本ければ、おもしろい利用法の一つだと思われます。
一概に古い形式だと言いきれないものを持つてい
るかも知れません。

したがって、因尾村には畑作物がなかなか豊か
す。松葉から見上げた發展、平原の西側の広い畑
の美しいしまからは、なかなかついででした。

この地帯に並行した川原木村(注直川村)や直尾村で
は、焼畑が明治以後ほとんど、すぎの植林にかわり
ました。

しかし、植林の交代する時に、数年間やはり焼畑
をやります。かんの焼といつて大根等に力を入れて
利用します。こうすれば、すぎのおいたちもよいそ
うです。神原の下から小川(赤坂)に越した所に杉
林は、土佐と同じように、みつまたが焼畑として作
られていたのはおもしろいと思えました。米花山(赤
坂)・六郎の中腹は、かつて小川のもばといつて、
よいそばのできる名高い焼畑でしたが、今はしだい
に、杉がこれに代わつていようでした。私は、こ
んな地方を焼畑の衰えた所と考えます。

焼畑として食糧を作るか、杉を育てて金にかえる
かは、明治以後の日本の經濟状態の变化によるか
でしょうが、直接には交通の發達によつて、木材が高
い値で取引されるようになったからでしょう。分
よく考えて下さい。

ロ 番五川・堅田川の中流と下流地方

番五川の中流、下流地、域の平原にも注意すると、
畑地がそここに開けています。上野村の井崎付近、
明治村の竹峯、番匠橋付近、下堅田の波越、木立の
中央部、それに中芳島の川沿い、女島の劍崎等をお

げることが出来ます。

川沿いの砂地であるために、水田にできない所だ
とすぐ気がつかれるでしょう。話を少しかえて考
えてみましょう。

私たちの祖先は、米を作るためにずいぶん苦心し
たようです。

因尾の平原付近から八畑以上も往復して、元山部
で米を作っていますし、難(坂市)の人ば、土屋島
に船ではるばる耕作に行きます。この努力は今も続
いています。

下堅田の竹筒や木立村の灌漑工事を見ればわかる
通りです。だから、畑になつている所は、よほど水
に困る所だと思つてよいでしょう。水の少ない所
では、重岡の酒利のように、とてもりつばな畑が
できています。田にすることができなかったのは、
残念であつたでしょうが、どうにもならなかつた
所と思
います。話をにもどしましょう。

こんな川沿いの畑地を自然堤とよくよんでいま
す。洪水のたぐひ、土砂を積み上げる所です。し
せん、洪水の害も受けやすいので、夏作は制限さ
うけま
す。もとほ桑畑によく利用していましたが、今は、
ほとんどいも畑になつています。

木立村の中央部だけは、近ごろまでくぬぎや
すぎ
の森林になつていました。洪水の害を考えたか、
砂
や小石が大きいので整地できなかつたからでし
ょうか、武蔵野の一部を思ふさ低地の森林は、
いくぶん
荒廢した感じを与えました。

ハ 海岸地方

海岸地方の畑地で、ほとんど段々畑だけしか
ない
所は、左ぶん、大島と大入島と中浦以来でし
ょう。

同じ島でも、屋形島には広い平地の畑があり、高島は低い台地状の山地にわつくり起伏する島ながら、大陸性の畑地があります。

扇状地標の三角州のある松浦、浦代、津井以西には、中央部に広い畑地があります。

水田の分布の所をもう一度読及返してください。名護屋村の野々河内、丸市尾にはほとんど段々畑がないほどに、広く低地の畑地が開けています。

ヨーロッパでは、地中海岸地方に、日本では瀬戸内海地方に多い段々畑を見る人は、どんな心持がするでしょう。美しい石垣を築いた、ほとんど水平なりつ成るものから、木の林を利用した簡単な土止め式のものまで、とにかく、どこから見ても、労力の結晶ではないでしょうか。日本人の勤勉なことは、段々畑によく表われています。

化学肥料の少ない今日では、こんな段々畑の上まで表を作るには、二百肌ぐらいの高さまで、下ごえをかっぎ上げます。調べた所によると、こえおけ一個に、海岸部のは一斗五升、干野部のは二斗五升入ります。そのうえ、耕作道の悪いことといたらお話しになります。

私たちの祖先の黙々として、忍従したこの非能率と過重な労働は、土地の少ないうえに、人口の多い海岸地方としてはやむを得なかったでしょうが、皆さんの時代は、どうなりましたでしょうか。

この畑土、耕作物の種類は、昔から変化していません。ずつと以前には、あわを夏に表を冬に作っていましたが、江戸時代中ごろから、夏はいれを作るよりになりました。今でも、食糧中心の耕作法はそのままだすが、明治以後には、世界貿易や国内商業を

目あてに、売れる品を作りだしました。

有明、松浦、浅海井、浪太等のふかん畑、名護屋村の桑畑です。この勢い日、一時戦争中にとまりました。

今後はどうなりましたでしょうか。注意するとおもしろいと思います。

大島や丹波、擬字では、一貫して食糧一点ばりでしたが、土地のせまいのが原因でしょうか。

山間部と海岸部に、同じように段々畑のあることをもう一度考えましょう。

低地の少ない点で共通な性質を持つので、骨を折って、山のふもとから順々に斜面を開くのでしようか。

佐伯の野菜畑では、一段高く土を盛って野菜を作り、低い所は田にしています。これは、なかなかおもしろいとは思いませんか。

私は、この畑のでき方を次のように考えます。もともと、川沿いの低い所は、畑にしてはよくないし、田にしては少し高いと思います。中村（佐伯市北中五）ではたぐさん棉を作りました。それが、いつとなく土を盛って、田と畑とを区別するようになり

ました。

こうすれば利用度が高くなります。いまでも、さとうきびでも、畑作はうまくできました。それが明治時代になって都市が発達するにつれて、綿の不況と考え合せて、野菜が耕作の中心となりました。

おもしろいしながらを作る田と畑の分布には、皆さんのおじいさんたち以前の激しい労働がこめられています。（以上）

(注) 1. 灰石の溶融状態を落下融合した火成岩片の集合、阿蘇山、鹿兒

島湾付近などに多い。

2. 陸岩角帯山地に石灰岩地帯、主として石灰の産出からなる水成岩

または変成岩を陸岩という。

3. コーム・粘土・砂がほとんど等分に含まれて、風化堆積物。

4. 焼畑に原始的肥料法の一つで、草生地、林地など、稻木、雑草

を焼き、そのまゝその横断に、そば、ひえ、大豆、あわなどを播付け、数年つづけて、地力が衰えるとともにそれを放置し、数年ないし十数年後再び焼畑として用いる。

切替畑ともいう。

5. 陸稲に陸地栽培する稻。生自芽、水稲ほど、水を要しない、

が、水稲より收穫少く品質も劣る。おかほ。

6. あわに稲科の一年生草水、米とまぜて飯にたき、飴や酒の原料とし、又小島の飼料とする。粟。

7. ひえに稲科の一年生草水、食用または家畜の飼料とする。古米備荒作物として栽培している。稗。

8. 五穀に米・麦・粟・きび・豆の総称。

焼畑、あわ、ひえ、陸稲、そば、棉、さとうきびなどには、なつかしさを覚えます。同時に、昔の人々の貧乏生活を想起します。

以前、小川(本庄村)のそばは有名でした。そばは、中央アジア、あるいは中国の原産といわれ、わが国でも古くから栽培されてきました。それは、涼しい気候を好み、やせ地で育ち、早ければ種をまいて、二か月くらいで收穫されるので、殺荒作物として重要なものでした。

そばの生産地が、山間へき地に多いのも、右に述べたような理由によるのでしよう。近ごろは、そばも、ごま分にはれず原料不足で、南アフリカやカナダからの輸入に頼っています。

また、畑に大豆・あずき・そらまめ・えんどうなどの豆類がよく栽培されていましたが、近年は少なくなりました。アメリカからの大豆の輸入が、茶間の話題をまいて、一喜一憂しているのが、現実の姿です。日本の農業

政策のありかたが、クローズアップされ、批判されています。

現在は稲作中心で、粟作である麦畑も減少しました。わたしたちが子供の頃は、一面、麦畑・桑畑で、麦作りも、養蚕も、非常に盛んで、また、さつまいもも多量に生産されていました。

昨今の大豆・棉花の衰退も遠慮せよ。他方、ムカンはその時代の藍・棉花の衰退も遠慮せよ。他方、ムカンは増産一点張り、現在生産過剰に悩んでいます。

いろいろな事情で、わが国の農業生産力は次第に低下し、農産物の自給率も大きく落ち込んできました。

すでに、小麦や大豆、飼料穀物の九〇%ないし一〇〇%が、海外からの輸入に依存しています。

世界の食糧需給は、各地の異常気象や社会主義国の生活水準の向上、開発途上国の生産力の停滞などで、一昨年からは特に緊迫し始め、穀物を中心に農産物の国際価格は、暴騰しています。

政府も、国内の畑作農業強化の方針を打ち出そうとしています。

前例にもれず、大分県の麦は年々減少し、昭和三十一年産麦で四四、八〇〇haあった作付面積が、昭和四十八年度では四七、〇〇〇ha(約十分の一)に縮小されています。

県では、生産奨励金を交付して麦作振興をはかり、昭和五十三年産麦で、小麦一〇、八〇〇ha、二条大麦五、〇〇〇ha、裸麦三、〇〇〇ha、合計一八、八〇〇ha(現在の四倍)の作付けを計画しています。

今後の農業政策は、漸次修正されるのではないかではないでしょうか。(おわり)